

山下新太郎氏談

山下新太郎氏は、曾て東京美術學校に學んで、俊才の名があつた、明治三十七年に同校洋畫科を卒業して、翌春巴里に渡り、歐洲諸國を歴遊し、研鑽を積んで、本年六月五日歸朝した。氏は留學中一九〇八年(明治四十一年)に『バルコン』をサロンに出品して及第し、翌一九〇九年には『讀書の後』外一點を出品して、再び及第した。『バルコン』は茲に掲載する、バルコンは橡側の意味で、外に意味はない、秋の午後五時頃を畫いたものだと氏は曰ふ、モデルになつたのは氏の友人でブルガリヤの女畫家で、其人の往まつて居た巴里の家のバルコンで畫いたのである、氏も亦其の畫家の爲にモデルになつたことがあるのである、『讀書のあと』は一婦人の讀書の後の感じを現はさんと企てたるものだからである。三圖共に華やかな光と色と柔かな調子と總べて快い感じが、何となく巴里あたりをしのびしめる。吾人は一人の新進歸朝者を迎ふるの喜びを覺ゆると共に、氏が長く其愉快なる藝術の都へ夢から醒めず、常に一つの泉となつて、我藝苑に寄與するところあらんことを祈る。



山下新太郎氏

私の往つたのは、丁度日露戦争がお仕舞に近づいて、もう日本の勝利と、ほど見當の付いた頃でした、ポーツマウスの構和談判のことは、巴里に着いてから聞きました。三十八年の三月に出發しまして、亞米利加の方を通つて、ポストンを見て、英吉利へも一寸寄りました、巴里のサロンを見たかと思つて急いだものだから、充分には見ずに巴里へ往きました。サロンは御承知の通り五月一日から、六月三十日迄、二箇月間ですから。巴里へ着いたのは六月二十五日でした、其年のサロンにやつと間に合つて、見ました。そうです、丁度丸

五年間居ました。ハア、西班牙へも往きました、丁度湯淺君がマドリッドに居まして、來いと云ひますから、往く氣になつて往つて見ました。湯淺君が巴里へ往かれてからも残つて居ました。夏の頃でしたグラナダやセヴィリヤなどへも往つて見ました、随分暑いことでした。マドリッドではウエラスケスの模寫を二三枚しました。繪は餘り畫きませんでした。第一畫室がないもんですから、氣が落ち着かないで畫をかく氣にもなりませんでした。畫室は半年以上も約束しないと、一箇月位では中々貸しませんからね、併し何とか彼とか云つて兎角繪をかかないで遊んで居るのが我々畫かきの常ですからねハハア。西班牙には六箇月ばかり居ました。矢張り巴里の方がよいと思つて歸りました。



『バルコン』 山下新太郎氏

居たとき、もう立とうとして居たとき湯淺君が來ると云つて來ましたので、待ち合せて一週間ばかり立つのを延ばしました。ポロニヤなどを一緒に見物しまして、私は先きに羅馬へ往つて、又彼處で、湯淺君を待ち合せました。旅は道伴がある方がいゝですね、勿論趣味が違つてちや、つまらんですけれどもね。畫の誓古ですか、初はエコールデボザール、官立の美術學校で、月謝がいりませんから、入つてみました。教師は各科とも三人宛居るので、一體美術學校は製版、彫刻、繪畫、建築の四科に分れて居ます。繪畫の方の教師は、私の入つたころはボンナ、コルモン、フェリエの三人でしたが、其

後ボンナが校長になつて、其後任にメルソンが、教師になりました。メルソンは油繪は餘り澤山はかかない人です、重ものにステインドグラスや、紙幣の下繪などを描いて居ます、教師は總て年寄です、世間では、皆な評判が餘り高くない、老大家でデッサンは確かですがね、日本で名の聞えてるラファエル・コランやジャン・ポール・ローランなども學校に關係がありませんよ、コランの受持は、製版と彫刻と、建築の三科の生徒にデッサンを教へて居ます、たしか七八年前からです、ローラン

ます。生徒は製版の科が一番少い、社會の需用が最も少いからですね。入學は極容易です、誰でも自分の描いたデッサンを持つて往つて、繪の教師の三人の中の一人に見せるのです、學校でも自宅でもいゝのです、教師が見て、善いとなると假入學が出来るのです、其後コンクールがあつて、及第したものは本科に入ることになるのです、誰にでも入れます、東京の美術學校を卒業した人などは無論入れます。コンクールですか、エ、競技は四月と十月と年二回です。御承知の通り、官立學校は皆な休暇が長いですから、何んでも、カトルジュエ(七月十四日)の祭——例の革命黨の勝利を得た記念日で、此日は

貴賤の別なく、市で踊るのです、一區に一つ宛、踊り場が立つて、老若男女の區別なく、一晚踊りあかすのです——其祭が済むと間もなく休暇になつて、何でも、九月十五日頃に次の學期が始まるのです。外にもアカデミージュリアンだの、種々私立の學校がありすが、それ等は皆月謝を取りますけれども、エコールデボザールは官立で無月謝です、官立でも決して格別善い譯ではないのです、けれども、佛蘭人にはブリードロームを得るのが目的で入るものが多いのです、ブリードロームは佛蘭西人に限りますから、外國人にはつまりません、併し月謝が入らぬから、外國人は金のないものが入つて居ます。

私はつらぬから、二年程で學校は止めました。解剖などの講義なども、こちらの美術學校のと、餘り違ひませんから、勿論こちらのよりも善いことは善い様ですけれど、つまりませんから、自分で畫室を借りて、自分の好きな教師の處へ往つて畫を見てもらいました。ハア、繪を見て貰ふのは非常に自由です、紹介も何も入りません、尤も紹介のある方は善いことは善いですが、大家は大抵面會日を極めて居ます、日曜の朝などが多く面會日になつて居ます、其日に行けば、畫を見て極く丁寧に親切に批評をして、快く導て呉れます、外の事は、教授を受けるには、必ず報酬を要しますが、繪の事は無報酬で、而かも懇切に批評をして呉れます、尤も澤山見てもらへば幾許か禮をするのが當然ではありますけれども、此方が慕つて往けば、唯で教へて呉れます、甚だしいのは佛蘭人の生徒などは旅行費までもねだりに行くのがある、すると、教師は自分も貧乏して居ながら、金を呉れてやる様ですね。そして生徒の方で、怠けて居たり、繪の出來が少くて見て貰らひに往かないと、却つて教師から小言を云はれる位です。熱心なもので、英國に居た人などに聞くと、英國の方では大違いで、教師の宅へ生徒が出入するなどと云ふことは、めつたにないさうです、巴里の方では、紹介狀一本あれば、如何なる大家にも教を受けることが出来る。昔は知らぬが、今はさうです。繪をかくと云ふ空氣は確に外とは違ひますね、はたの空氣が、とても怠けては居られぬ様になつて

居ますね。
私の往つた一二年前から、サロンドウトンヌ、即ち秋季展覽會が起つた、それには美術史上重大な意味があります、美術上の革命を具體的に現はしたものと見られます、併し或主義の人から云はせると墮落だと云つてます、畢竟春のサロンの振はぬ爲に起つたもので、それは無理ならぬことです、主義は大邊よい、勿論弊害も多いであらうが益も多い、容易に利害を判断することは出来ないです。秋季展覽會の最も有益なことは、毎回参考室を設けることです。前にはルノアールの作を集めたことがあつた。近頃はエドワード・マネの作、佛蘭西國內にあるものは殆んど全部、それから、アングルの作品の大部分、尤デッサンに重きを置いて居たので、デッサンの大部分と、油繪の一部分を集めてありました。アングルと云へば、クラシック派の大家でデッサンの代名詞の如く、普通思はれて居るのですが、シークラシック派の人にも、非常に擔つぎ上げられて居ます、自分等の主義もアングルから出てるのだと云つて居ます。秋季展覽會には随分奇抜なものが出ます、奇抜の隊長はアンリー・マチスですね。此派の遣り遂げた仕事は色で、前人の未だ着手しなかつたところを成し遂げたのです。
初はルノアールも加つて出品して居ましたが、此頃は殆んど出さなくなりました。此時山下氏は齋らし歸つたルノアールの作品を示された、綠野に獨坐せる婦人を書いたもので、華やかにして落ちつきのある色彩、光と色とに對する精緻なる觀察になれる複雑微妙なる調色、和らかなる筆致にふつからとした温かみのある繪、流石大家の作と感服する。ルノアールは普通アンプレシヨニストと見做されて居る、處が當人はアンプレシヨニストではないと云つて、大邊迷惑がつて居ます。當人は古いところを遣つて居る積りで、唯色の上では新しいところを遣つて居る積りで居る。自分の繪は愉快な色を現はしたいと思つて居る」と嘗て云つたことがある。愉快と云ふのは憂鬱と云ふ様な字の反對な意味ですね。私は三四回繪を見て貰つたことがありますが、謙遜な老大家で、私はとてもあなたの繪を批評すると云ふ様なことは出来ぬ。唯助言することの出来るのは、管續けてお書きなさい、畫は腕でかくものではない、眼で見えるもの

だから、古人の作などを頭に置かないで、自然から得た感じを充分に現はせば善い、決して畫を描き崩すと云ふ様なことを心配せずに、遣れるだけ遣るが宜い、自分の感じを充分に出せるまで遣るが宜い、其時若し其結果が、失敗に歸しても次の時には必ず好果を得る、そうすれば必ず進歩する繪は絶えずそう云ふ風に畫いて居れば必ず進歩するものだ。そう云ふ風にしなければ、一處に停滯して了ふ。あなたの繪を巧いか拙いとか、評するものは無駄なことですよ」と言つてました。もう餘程年寄ですがね、謙遜な態度には驚きます。

廣瀬中佐の銅像に就いて

邊渡長男氏談

五月二十九日軍神廣瀬中佐の銅像除幕式が舉行された。原型の作者は邊渡長男氏である。記者は一日氏を日暮里の寓に訪ねてその苦心談を聞いた。苦心談なんてそんな大したものはありませんがね」と飽迄謙遜な態度で氏は次の如く語られた。

技術はあの通り拙いものではあるけれど、像に鑄られた人は軍神とまで稱へられて、それに對する一般社會の同情が非常であるのと、且つは場處があつた通り往來の激しい場處で、苟も一寸でも足を東京に入れた者は、彼處を通らざるには濟まされないと云つた程の行通の中樞になつてゐるのだから、自然世間の注目を惹かすには置かないと云ふことは、作者たる自分に取つては非常に心嬉しいことである。

併しあれを造ると定まつてから愈々除幕式を見るに至るまで、前後六年の歳月を経過してゐることであるから、その間には随分色々な變遷もあつたし、又様々な困難にも際會した。私は今度の像を造る前に今一つ廣瀬中佐の銅像を造つてゐた。

それは私が故人と同郷であるからと云ふ意味から殊に私に依頼したので、郷里の常磐公園と云ふのに立てた。像の高さは六尺許で海軍の大禮服を着けてゐる。私が今度の銅像を造るやうになつたのも、實はこの小像を造つてゐたといふことが因を



邊渡長男氏

なしてゐるのである。丁度その頃、郷里へ立てる廣瀬中佐の銅像を造つてゐた時分(三十八年)、海軍

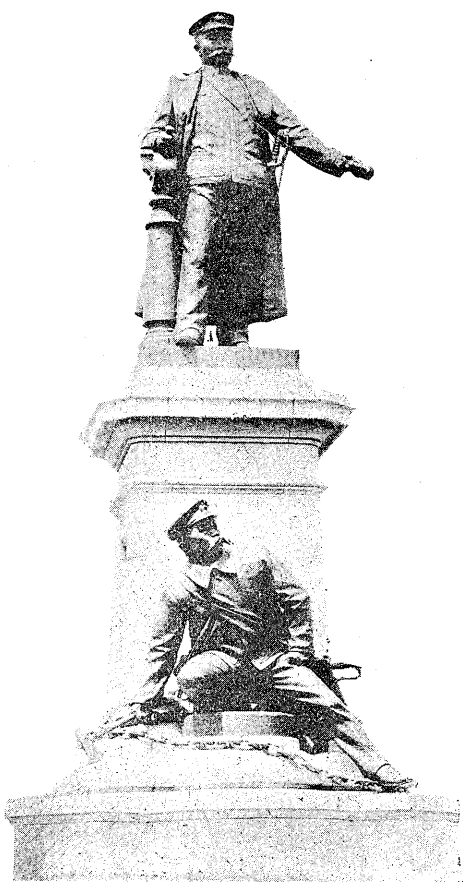
軍令部の方から突然私の處へ電報が来て、私の處へその銅像を見に行くからとのことであつた。私は不思議なことだと訝つてゐたが、後になつて譯が分つた。と云ふのは、澤造兵廠長が廣瀬中佐銅像建設に就いて非常に熱心に盡力してゐて、私が中佐の銅像を造つてゐるといふことを聞き込まれたものだから、それを軍令部の方へ傳へた。其處でこの電報となつたのである。

處で軍令部から電報が届いた數日の後、私の處へ財部少將を初めとして、小笠原大佐、森大佐等六七八人の人々が見えて、郷里へ立てるのを造つてゐる處を見て行かれた。さうしてかういふ物を造るには多少軍事上の知識がなければいけないからと云ふので、丁度その時分横須賀へ朝日艦を他が入港してゐたので、私がそれを見せて貰ふに就いても色々便宜を與へてくれた。

その後財部少將は海軍次官になられ、何しろ皆海軍の將校のことであるから一處にちつとしてゐられない爲に、翼賛會の主腦も幾度か變つた。銅像の作者に就いても色々異議が出て、一時は懸賞に附さうかと云ふやうな話もあつた位であるが、眞田大佐、吉川中佐の二氏が主として盡力せられるやうになつてから、愈々私が引受けることに極つた。それは丁度四十一年の末のことで、其時私の前に提出された條件が三個ある。第一條は私が故人と郷里を同じうすること、丸で縁故のない人間が造つたと云ふよりも、後世に残す紀念としてはこの方が適に意味深からうと云ふのである。第二條は、兎に角私は今迄一つ廣瀬中佐の銅像を造つてゐる。詰りそれに對する私の藝術は或程度まで證明されてゐると云ふものである。第三條は、さういふ譯であるから私は當初からこの銅像に就いて研究を積んでゐる。今新らしく他の人に依頼して見た處で、是以上研究の方便を得ることとは難かじからうと云ふのである。

斯様にして愈々私が引受けることになつたから、今度は場所の問題で、初めは日比谷公園にしようかと思つたが、市へ聞いて見ると彼處へは、銅像を立てられないことになつてゐると云ふ。そこで東京市の土木掛へ掛合つて十一箇處程候補地を撰定して貰ひ、實地踏査は私の方でやつたが、一つも適當した場處がない。結局私の方で須田町の今の場處を考へた。聴けばゆくゆくは彼處を公園にでもしようといふ計畫があるのだから、旁々以て格構な土地である。そこで神田區長や角田市區改正局長にも面會してその賛成を受ける。軍令部の方でも、彼處なら誰の眼にも觸れて、紀念像の目的を貫くことが出来るからと云つて喜ぶ。

處が彼處は市で所有してゐるので、土地の性質が非常に面倒な關係になつてゐる。それが爲色々



廣瀬中佐銅像